

---

**あなたが、ここに、いればいいのに**

D a m

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

あなたが、ここに、いれぱいいのに

### 【Nコード】

N1420B

### 【作者名】

D a m

### 【あらすじ】

冬に入ったばかりの頃、少女はライトグリーンのセーターを着た男性を見かけた。それは……ホラー色はやや薄いとは思いますが、ちょっとした夜話と違って頂ければ幸いです。ちよっぴりユリ風味漂ってるかも…… ; ; ;

あなたが、ここに、いれぱいいのに

SCENE 0

その日は風も強く、カラカラに干乾びた木の葉が一層哀れに高く舞い上がっていた。つい先日まで風景は秋を見せていたのに、ここ数日の冷え込みで一気に冬へと移り変わっていた。彩り鮮やかに着飾っていた並木道も気づけば既に茶色に褪せ、木枯らしの中に木の葉を投じている。秋は短過ぎて、感じ入る間も無かったかのように。そんな並木道の中、一人の少女がゆっくりと歩いていた。背の高い、艶のある腰まで伸びた長い髪が印象的な少女だった。寒さの為なのか俯きがちに歩いている少女のその姿は、色褪せてしまった並木道を憂いているかに見える、その様はこの季節の風景と相俟つてまるで一枚の絵画を思わせる。

ふと、少女の歩みが止まった。視界の端を掠めた何かに、思わず足を止めたのだろう。少女の瞳が地面から空へと動く。それを見計らったかの如く、一際強い風が少女を掠めた。絹糸の様な細く長い髪が、靡く旗の様に暴れる。そこから現れた少女の顔は、何かに挑むかのきつい眼差しの……酷く美しい顔だった。

切れ長の瞳は東洋系の特徴を持っているのに、睫毛が長い為か小さくは見えない。良く見ればその黒い瞳が角度によつては深い紺にも見える事に気づくだろう。彼女の身体付きはお世辞にも女性らしいとは言えないが、寧ろそれが逆に神秘的とも言える中性さを醸し出していた。

そんな誰もがはつとする様な少女のその紺の瞳は少しばかり後方に動き、そこに現れた人影を捉える。それはライトグリーンのセーターを着た三十路程の男性だった。特に少女を気にするでもなく、そのまま少女を追い越して並木道を進んでいく。それを少女はずっと瞳で追っていた。

あなたが、ここに、いれたいのに

「……」

あなたが、ここに、いればいいのに

瞬間、強い風が吹き付け、少女の瞳は反射的に閉じられる。風が去り、少女が瞼を開くと、既に男性の姿は無かった。在るのは並木道の先に佇む、小さな書店だけだった……

SCENE 1

街外れにある、ちょっとだけおしゃれな小さな書店。そこが篠藤しのへ真澄うますみのバイト先だった。大学から近く、シフトの都合が良かった為、先月から彼女はここで働いている。要領は悪くなかったのも、そこに仕事も覚え、周りにも馴染んできた。

「お疲れ様です」

カウンターに居るスタッフに声を掛けると、何か考え事でもしていたのかそのスタッフは真澄の声に驚いた様子で顔を上げる。短い髪が活発さを思わせる、可愛い感じの真澄と同じ年程の女性だった。

「あ、ああ……お疲れ様」

妙に覇気が無かったものの、彼女は笑顔で応えてきた。その一言で調子を取り戻したのか、そのまま少々雑談へと流れる。

「篠藤さん、今日は早いなだね」

「ええ、変に時間が空いてしまって……何時もだど何処かで時間が潰せるんですけど、半端過ぎたんでそのまま来たんです」

「そっか……今、バック誰も居ないから、時間まで居ても大丈夫だよ。それとも、何か本探す？」

その女性スタッフに言われ、真澄は少しだけ考える。彼女

高杉恵子たかすけいこはよく真澄にお薦めの本を教えてくれ、真澄はそのどれも気に入っていたのだ。

「そうですね……でも、まだ読み終わってない本があるから、今日はそれを読んです。読み終わったらまた、お薦め教えて下さい」  
微笑む真澄に、恵子はうんつと応えたと何故か少し不安そうな顔をした。真澄はそれに気づきつつも、敢えて気づかない振りをしてバックヤードへと向かう。店内には殆ど人影は無い。きっと彼女はそれが不安だったのだらうと、思いながら。

あなたが、ここに、いればいいのに

SCENE 2

真澄はバックヤードに入ると自分のロッカーに荷物を置き、まずは長い髪を纏める。簡単に三つ編みにして、米噛み付近と耳の近くをピンで留めた。髪の毛の纏め方が見苦しく無いかチェックする為、真澄が後方にある鏡を振り返る。特に気になる点は無いと思った瞬間、予期せずバックヤードと店内を繋ぐドアが開いた。

まず視界に飛び込んできたのは、鮮やかな緑。それは並木道で見た、ライトグリーンのセーターだった。鏡越しに見たそれを、真澄はゆっくりと振り返り確認する。

「……………お疲れ様です、店長」

入ってきたセーターの男性は、この書店の店長だった向井。真澄にとつては面接時や初期指導などでお世話になった、有難い人物だ。接客業の鑑の様な人物で、何時も柔和に笑っている。

「ああ、お疲れ様。いつもご苦労様だね」

真澄の掛けた声に、向井は微笑んで言葉を返してきた。そして室内に備え付けられている机へと着くと、その引き出しから書類を取り出し、徐に計算を始める。月末が近いので、何かしらの処理をしているのだろう。

「すまないね、仕事が立て込んでいるもんで……………気にせず時間までゆっくりしていいよ」

真澄が立つたままなのを気にしてか、向井はそう言ってまた微笑んだ。真澄は向井の言葉に甘えようかとロッカーの前に移動したものの、少し思案する様に動きを止める。目を閉じて逡巡し、そして決意とも思える様子で瞳を開けた。

「……………」

無言で真澄は部屋の隅にあるポットへと進む。スタッフ同士が共同で購入したコーヒーや紅茶が、そこへは置かれているのだ。その一つ、向井が家から持ってきたハーブティーを手に取る。クリーム

あなたが、ここに、いれたいのに

あなたが、ここに、いれたいのに

色のその紅茶の缶からは、微かにマスカットに似た香りがした。

ポットの脇に置かれた一番奥のマグカップを取り、それにその紅茶を淹れる。湿気を含んだ暖かな空気が、寒い部屋に潤いを与えた気がした。

「どうぞ」

言いながら、真澄はそつと今し方淹れた紅茶を向井の横に置く。

湯気に乗って飛ぶ甘い香りに、真剣過ぎる程真剣に書類を睨み付けていた向井の表情が少し和らいだ。

「ありがとう……」

そう言うと、向井はしみじみとマグカップを見詰め、温まったマグカップに手を添える。そのまま、まるで悴かじかんだ手を温める子供の様にずつとマグカップに手を添え続けていた。

「……この紅茶はね、妻が旅行のお土産にと買ってきてくれたんだ」  
ぽつり、言葉が漏れた。向井の視線は登る湯気に留められたまま。  
「風邪を引いた時に飲むんだそうだよ。僕はよく、風邪を引くから」と

じつと湯気を見続ける向井の目は虚ろで、言葉は淡々と続けられていた。

「このセーターもね、手編みで。去年のクリスマスに貰ったんだよ」  
気の所為か、顔色が悪く見える。いや、青白く、透き通ってさえ思えた。

「……思えば、その頃からかな。仕事が忙しくなってね」

「……………」

向井の言葉を、真澄は無言で聞いていた。確か、向井がこの店の店長となったのは、去年の年末前と聞いている。その頃から、仕事も忙しくなったのだろう。

「帰るのは夜遅く、出掛けるのは朝早く。休日なんて、有って無い物だった」

向井の表情は一層虚ろに、言葉は最早真澄に言っているのかも怪しかった。

あなたが、ここに、いれたいのに

「家に居る時間は減っていった。まるで僕はここが家の様になったよ。この間、とうとう子供に『おじさん』と呼ばれた……」

それは、悲しい話であったろう。だが、それを語る向井の表情に変化は無い。淡々と。唯、淡々と語っていた。それを受ける真澄も、また無表情だった。淡々としていようとよりは、冷淡と言った方が合う程の無表情。

「……春には、二人目が産まれる。その為にもと頑張れば頑張るほど……僕の居場所は家でなくなるんだ」

その言葉を最後に、向井は無言となった。じつと湯気を見詰め、手を温め続ける。真澄はほんの少し目を伏せ、そうして口を開いた。「……もう、いいんではないでしょうか」

部屋が少し肌寒いからか、真澄は両手で自分を抱き締める様にし言った。

「店長は頑張られました。それはこのスタッフ、みんな知っていますよ。いえ、スタッフだけではなく、お客様や奥様も。きっとお子さんも、解ってくれます」

真澄の言葉にも、向井は湯気を見詰めたまま返す。その様は、壊れた機械を思わせた。

「そうか……そうなのかな？ ああ、でも仕事が……」  
責任が、肩に押し掛かっているのか、向井は深く項垂れる。

「だから、もういいんですよ。覚えていませんか？ 店長は、長い休みを貰ったでしょう？」

ゆつくりと、向井が顔を上げた。それでもまだ、後ろ髪を引かれる様に、視線が広げられた書類へと移る。経費、予算、人件費、売上目標、今月売上、達成率……様々な言葉が書かれた、けれども真澄にとっては意味の解らない紙切れの束に。

「……けれど、家に帰れるだろうか？」  
「帰れますよ。この間、お宅にお邪魔した時に、まだ椅子はありませんでしたから」

言葉にしながら、真澄は思い出していた。ダイニングキッチンに

あなたが、ここに、いればいいのに

置かれたテーブル。置いてある椅子は四つ。一つは妻、一つは長男、一つはまだ産まれてない子供、最後の一つは……

「そっかあ……………」

漸く、向井の顔に変化があった。何と言えは良いのだろうか……破顔とも言えるが、真澄には泣きそうな顔にも見える。

「……………奥様、待っておられますよ」

真澄の言葉を待っていたかの様に、向井はゆっくりと立ち上がった。書類も紅茶もそのままに、ドアへと向かっていく。その後姿を、真澄は矢張り無表情で見送っていた

SCENE 3

時間となったので、真澄はエプロンを着けて店内へと足を向けた。ふと出入口に目を遣れば、丁度自動ドアが閉まる所だった。きつと向井が帰っていったのだろうと、真澄は安堵の息をつく。

「お疲れ様です」

カウンターに恵子が居たので、真澄は挨拶がてらに声を掛けた。瞬間、びくと恵子の肩が、大げさな程に跳ねる。恐る恐ると言った風体でこちらを振り向いた恵子は、真澄の顔を見た途端泣きそうな顔になって駆け寄ってきた。

「しのとーさん……来てくれて良かったあ……」

真澄の腕に縋り付く様にして、恵子はそれだけ言った。触れている部分から、恵子が微かに震えているのが分かる。

「もう、ヤだ……さつきも誰も居ないのに、勝手に自動ドア開いたし……」

声も震えているのは、泣きそうになっているからだろう。ここ最近、こんな事が多々起こっていた。自動ドアが開いたのでいらつしやいませと声を出せば、店には自分の他に誰も居ない。本が大量に売れたので棚の空きを埋める為に売り場に出れば、誰も触っていない筈なのに既に空気が埋まっている。用が有ってバックヤードに入ると、ついさつきまで誰かが事務処理をしていたかの様に机の上に書類が出されている。恵子は他のスタッフと違い、フリーターなので勤務時間も長く、人よりそう言った現象を多く目撃していた為、最近ではノイローゼに近い感じにすらなっていた。

「………やっぱり、まだ居るのかなあ……向井てんちよ」

それは、最近スタッフの間で密やかに囁かれていた噂<sup>うわさ</sup>だった。勝手に広げられていた書類はどれも責任者クラスの物だったし、何より極めつけだったのが副店長がタイムカードの集計をしようとした時。もうタイムカードを押す筈の無い向井が、有り得ない日時に夕

あなたが、ここに、いれたいのに

あなたが、ここに、いれたいのに

イムカードを押ししていたのだ。

「急にあんな事故に遭って、心残りがあつたのかなあ……」

この店の店長である向井が事故死したのは、先月の頭だった。帰り道の居眠り運転。よく在る過労の末の事故だ。車は電柱に激突し、運悪く運転席側が大破した。精々、苦しまずに即死したのが幸いだつたとしか言い様の無い、悲しい事故だつたと言う。

「向井てんちよ、あんなに頑張つてたから……」

堪え切れなかったのか、恵子の目から涙が零れた。恵子は向井の事を『てんちよ』と『う』を抜かして呼ぶ。それは長く向井の下で働いていた恵子の親愛の現れである。

「子供、二人目が産まれるから頑張って頑張つてたのに、何であの人が死ななきゃならなかったのかなあ……すごく、悔しい……」

フリーターとは言え、恵子は仕事にプライドを持っているタイプだった。少なくとも、仕事中に泣き出したりする様な人物では無い。それを知っていた真澄は、思わず涙を流してしまった恵子を想い、その背中を慰める様に軽く擦る。

「……いい人、でしたね、店長。数日しか一緒に働けませんでしたけど、私も本当に良くして貰いました」

「……うん……うんっ……」

後は、嗚咽に飲み込まれてしまった。ひたすら真澄の腕に縋って泣く恵子の背を、真澄は黙って擦り続ける。彼女が泣き止むまで、唯、ずっと……

SCENE 4

バイトも終わり、真澄は家路に着こうとしていた。ラストまで残っていたのは真澄と恵子。全ての業務を終えて、店の鍵を恵子が掛けていた所だった。

その後、恵子は丁度休憩時間だった事もあり、少し落ち着いた所でバックヤードに入ってしまった。書類もマグカップも真澄がきれいに片付けていた為、バックヤードでの出来事を恵子に気取られはしなかった様だ。

「……今日は見つとも無い所見せちゃって、ごめんね」

恵子の言葉に、真澄は軽く首を横に振った。実は、真澄は人の感情を見るのが嫌いでは無い。例え、それが世間一般に見苦しいとされる事だとしても、素直に感情を外に出せるその様が。それは持たざる者が持つ者を羨むやいひ、複雑な感情なのかも知れない。

「高杉さん」

吐く息が白くなる程では無いが、それでも身を刺す寒さの中、徐おもむろに真澄は口を開いた。

「こんな事言うのは、きつと酷だとは思いますが……余り、店長の事を思い詰めないで下さい」

驚きに恵子の目が見開かれた。彼女は素直に感情を瞳に表すので、その大きな黒い瞳が真澄は好きだった。今はそこに、哀しい様な怒った様な複雑な表情しづを宿している。

「有体な言葉しか出てこないんですが、きつと高杉さんがそうやってずっと悲しんでると、店長も安心して成仏出来ない気がします」

今度は、恵子の瞳が怒り一色に染め上げられる。こんな時ですら、真澄はその瞳をずっと見続けたいと思ってしまうのだ。けれど、それを表情に登らせる事はない。しないのでは無く、真澄には出来ないのだ。

「……………そんなっ」

あなたが、ここに、いれたいのに

あなたが、ここに、いれたいのに

何かを言い掛けて、けれど恵子は言葉を止めてしまった。飲み込まれた言葉は『あなたに何が分かるの』だったのだろうか、それとも『何も知らないクセに』だろうか。何にせよ、否定の言葉だったに違いない。

暫くの間、恵子は視線を真澄から逸らしたまま、下唇を噛んでいた。しかし、不意に力を抜いた様に肩を落とし、ゆっくりと真澄へと顔を向ける。

「分かってるの、それは」

今度は決意に似た諦めの表情が、黒の中に現れる。真澄はじつと、それを見詰める。

「こんな風に何時までも、引きずるのって良くないのは」

ぼつり、ぼつりと。恵子は自分に言い聞かせる様に、語り出した。「最近、特におかしいの、私。ドアが開けば向井てんちよが入ってきた気がするし、勝手に柵メンテナンスがされてれば、向井てんちよがしてくれた気がしてた」

決意を示していた黒が、滲む。それが涙で瞳が潤んでいるからだと気づくのに、真澄は少し時間が掛かった。

「それが、本当に酷くなってきた……今日なんて、出て行く向井てんちよの姿が見えてた」

涙を流す事が見苦しいと思っているのか、恵子はぐっと涙を堪えている。それは泣けば負けだと思っ込んでいるかの様だった。

「きつと、私、おかしくなってきたんだ……」

「居ました」

恵子の様子に耐え切れなくなったのか、真澄は気づけば口を開いていた。

「私も見ました。店長の後ろ姿。ライトグリーンのセーターを着てました」

「え……？ 篠藤さん、も……」

真つ直ぐに見詰めてくる瞳を、真澄は確りと見詰め返す。その色を、覚え込もうとするかの様に。

あなたが、ここに、いれればいいのに

「きつと、高杉さんが心配で、ちょっとだけ様子を見に来てたんです」

「ほん、と、に……?」

恵子の言葉に真澄が強く頷くと、恵子の瞳から堰を切った様に涙が溢れ出た。

「……うっ、ご……ごめんなさっ……ごめっ……むかつ、てん、ちよお……」

泣きながら、何度も恵子は謝った。ひたすら、向井に謝り続ける。「しんぱっ……かけ、て……ごめっ…………だい、じょうぶっ、です……も、だいじょ……」

泣きじゃくりながら、何度も繰り返す。私はもう、大丈夫です。心配しなくていいです。ちゃんと、やっていきます。安心して、成仏してください。嗚咽交じりにそう、恵子は言っていた。咽の奥が涙と声で詰まり、痛みすら上げながらも、それでも何度も何度も繰り返し続ける。

泣きながら、全ての感情を吐露するその姿は、見る者が見れば滑稽であるだろう。けれど、真澄にとっては尊くすらあった。人らしく人の感情を現す、その姿が。

SCENE 5

日が落ちて暗くなった並木道を、一人真澄は進んでいた。闇に吞まれたその風景は、行きとは違う寂しさを感じさせる。その道の中を、向かいから歩んでくる人影が見えた。

闇の中、仄かに光る様にして向かってくる人影。それは、ライトグリーンのセーターを着ている。真澄はそれを見て、ふう、と小さくため息をついた。

「……………」

その人影と擦れ違う瞬間、真澄はまるで髪を掻き揚げるかの仕草で自身の左手をその人影に突き刺した。そのまま、人影は真澄の左腕に刺さる形で歩みを止める。人影から突き出た真澄の手は、何かを握っている様に拳を形作っていた。

「家に帰れって言ったのに」

そう言った真澄の表情は、感情の欠片さえ見えない。現在の行動と相俟って、それは酷く冷酷に思えた。

「貴方が現れると、彼女に良く無いの」

言いながら、真澄は左手を勢い良く引く。瞬間、人影は砂で出来た人形のように、ぼろぼろと崩れ去った。後に残ったのは、黒い靄もやに似た何かだけ。

「彼女があれだけ想ってたから、譲歩してあげたのに……残念、ね」  
人影は消えたのに、真澄はまだ語り掛ける。左手に握った、そこに。良くみれば、その拳の中から逃れようとする何か、そこには蠢うごいている。必死に暴れるそれに、真澄は話し掛け続けた。

「悪いけど、私に取っては死人の貴方より、生きてる彼女の方が大事なの。でも、うっかり彼女に引つ張られた貴方も悪いのよ？」

そして、それを最後に真澄は手の中の物を、ぐちゃりと握り潰した。どろりと、真澄の拳から黒い何かが零れ落ちる。それは、向井だった物。正確には向井の一部だった物だ。もう、向井は死んでい

あなたが、ここに、いれたいのに

あなたが、ここに、いれればいいのに

るのだから。

人は死ねば、何も残さない訳では無い。何と呼ぶのか真澄にも分からないが、何かを残すのだ。それは魂とも呼ばれる物かも知れない。だが、真澄はそれを人だった物の残滓と捉えていた。

それは多くは行くべき所に早々に去るものの、稀に暫く留まる物がある。そして、それらは酷く曖昧な物だった。所詮は死人の残り滓だからか、生きている人間の意志に簡単に左右される。今回も、単にそれが起こっただけだったのだ。

## SCENE 6

最初は多分、勘違いから始まったのだ。自動ドアが独りでに開く。それ自体は実は珍しい事では無い。例えばスーパールのビニール袋が強い風に飛ばされ、偶然自動ドアのセンサーに反応する。当然自動ドアは開き、それはドアが開いた事しか認識しなかった人物から見れば、独りでにドアが開いた事になるだろう。それが、あの書店でも起こっただけだった。

運が悪い事に、それが向井の死後間も無い時で、更に見たのが恵子だった。その時、彼女が何を思ったのかまで、真澄には分からない。もしかしたら思わず、向井が入ってきたと想像してしまっただのかも知れない。そして、それが切っ掛けとなったのだろう。棚メンテナンスも同じだ。彼女の死角で誰かが棚を整理して、恵子が気づかない内にそこを立ち去っていた。唯、それだけ、だった。

哀しい事に、人は自分が望んでいる事を無意識に選ぶ。唯の偶然と片付けず、もしかしたら、と希望を見出す。冷静に判断する事は、感情の伴う人間には酷な話だ。誰だつて望む物を見たいし、聞きたいし、されたいのだ。それは決して欲望では無く、純粋な別の何かなのだ。

それ故に、恵子はその公司向井を見出し、更には本当に彼の残滓を呼んでしまった。それは恵子の想いに応えるかの如く、ドアを開け続けた。それだけなら、いずれ消えいく物だったのに、他の物が加担をした。

流石に偶然と片付けられない現象が続けば、誰もがそこに理由を探し始める。誰が言い始めたのか、向井の幽霊だと噂が流れた。所詮、向井も人間なのだ。増してや管理職の彼は、恨まれる事もあつただろう。例えどれだけ人徳があつたとしても、逆恨みすらこの世

あなたが、ここに、いれたいのに

あなたが、ここに、いれればいいのに

には存在するのだ。そう言った向井に良く無い感情を持った人間が、口火を切ったのかも知れない。

そして不特定多数の人物が噂に流され、向井の残滓を肉付けしていった。ぼんやりとした何か名前すら無い存在が、どんどんと『向井の幽霊』として存在を許されてしまったのだ。何時の間にかそれは大きくなり、遂には書類を動かしたりタイムカードを押ししたりし始めた。

このまま行けば、それは確実に良く無い方向へ向かっていただろう。物理的な力を得るまでになっていたそれは、確かに恵子に影響を与えていた。少しずつ恵子の思考を曲げて、どんどんと追い詰めていく。それは故人・向井の意思では無く、寧ろ<sup>むし</sup>その他大勢が囁いた『恵子が連れて逝かれる』と言う、無責任な噂故だろう。追い詰められて最近では、恵子は自殺し兼ねない雰囲気すら醸<sup>かも</sup>し出していた。

だから、何としても恵子を手助けしたかった。ただ、真澄に取ってはそれだけ、だったのだ。

SCENE 7

真澄は、恵子の瞳が好きだった。彼女の瞳がちょっとした事で一喜一憂し、くるくると目まぐるしく変わるのを見るのが、唯々、好きだったのだ。それは、自分が人と違う瞳を持つが為の劣等感から来る物だったかも知れない。それとも、自分が感情を殆ど持てない人種だからなのかも知れない。どちらにしろ、どんな結果になったとしても恵子が死ぬ事だけは避けたかった。

だから、選んだのだ。

『私、ちゃんと落ち着く為に、実家に帰ろうと思ってるの』

今日聞いた恵子の言葉で、一番辛かった言葉だった。けれど、それに対して真澄は微笑んで聞いていた。

『このままだと、きつとダメになっちゃうから……今日ね、決心したの』

恵子の実家はかなり遠い。偶然に逢える様な場所で無い事は確かだ。それでも……それだけ離れたとしても、死に分かれるよりはましだと。恵子があんな残り滓なんかに成るよりはましだと、ずっと繰り返し自分に言い聞かせていた。

『明日、上に話すよ』

普通の人間なら、これだけ悲しければ泣くんじゃないかな、と。

そうぼんやりと真澄は思いながらも、微笑みが消えない自分の顔があった。何時だって、真澄はそうだった。物心ついてから、泣いた記憶は無い。感情が無いとは思わなければ、表情に出る程に感情を昂ぶらせた記憶も無い。それを自覚してからは、努めて感情を表情に出す振りをした。

人が泣けば泣く振りを、笑えば笑う振りを。そして、そうしている内にどう言う場面で泣く振りを笑う振りをすればいいのか、身につけてしまった。それは嘘とは違う、集団の中で孤立をしない為の処世術。そうしなければ自分は、今の様に人の群に混ぜては貰えない

あなたが、ここに、いればいいのに

あなたが、ここに、いればいいのに

かったのだらうと、真澄は気づいていた。

そう気づいてから、真澄は同時に惹かれる様になったのだ。恵子の様に人らしく、感情を持てる人間に。今までに、幾度もそんな人を見つけた。そして、その感情を見詰めたくてそつと彼ら彼女らに近付いた。

けれど、何時だつて誰もが去つていった。単純に別離であつたりもしたし、最悪な場合は死別でもあつた。だけでも、原因は常につだつた。今日だつてそうだ。そう思いながら、真澄は不快げに己の左手を見た。まだ未練がましく纏わり付く黒い液体。自分以外にはきつと見えないそれを、真澄は軽く左手を振る事で拭い去つた。

何時だつて、これらに……

そう思いながらも、真澄は気づいていた。知らずにそれを呼び寄せるのは、自分も同じなのだ。もしかしたら、それらの存在を識っているだけに、強く呼び寄せるのかも知れない。今回の事は、本当は自分が関わつた所為で起きたのではないか。きつと、そうなのだ、真澄は軽くした唇を噛んだ。

それでも、人と関わらずに生きていけない自分を識つていた。けれども、きつと誰も自分を解らないだらう事も、識つていた。昔、集団の中の孤と成らない為の術を身につけた。けれども、それ故に理解される術も失つた。本当の孤独は、集団の中で馴染みながらも自分がその中で孤であると識つてしまう事だと、真澄は痛感する。

並木道はもう暗い。ほんの数メートル先も見えない。まるで今の自分だ。この暗い道、それでも近くにはきつと人も居るし、暖かい家もある。けれど、それは自分の知人では無いし、自分の家では無い。結局は己の寄る辺では無いのだ。この並木道には終わりがあらし、その先には自分の家もある。だが、自分の道はどうだらう。何時まで、暗闇が続くのか教えてくれる者も無い。

冷たい風が、顔を薙ぐ。暗い道に自分独りの存在を認めながら、

あなたが、ここに、いればいいのに

真澄は再び歩き出した。

SCENE 7 (後書き)

ホラーと言うのは少々違う風味となってしまうので、ホラーっぽいホラーを想像していた方には申し訳ありません(; ;) 私なりの心霊現象の見解(?)を示してみたく、書いてみました。まあ、それだけでは無いのですが・・・何かご感想・ご意見・ご批判、ありましたらぜひ伺いたいのでお願いします。( ; ; )

しかし、一晩でこれだけ書き上げると・・・肩がっ！冬は特に肩を温めるパッドが必需品ですね( ^ ^ ; )

あなたが、ここに、いればいいのに

あなたが、ここに、いれたいのに

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1420b/>

---

あなたが、ここに、いれたいのに

2008年11月7日07時00分発行